

近江路の俳諧 風雅のネットワーク

—愛知川の里秋—

藤井 美保子

愛荘町歴史研究 第1号 別刷  
愛荘町教育委員会 文化振興課  
2008年2月



風雅のネットワーク―愛知川の里秋―

藤井 美保子

琵琶湖の右岸に沿って続く近江路は、古来遙かな東国へ向う人々や憧れの都に上る人たちが行き交う交通の要路でした。また多くの歌枕の地があり、野洲川、鏡山、老蘇の森、蒲生野、不知也川、鳥籠の山と、懐かしい地名は西行や芭蕉をはじめいつの時代にも詩人の心を捉えて離さないものでした。都に近い地の利によって、文物と文人たちの往来は繁く、近江路は早くから経済的、文化的に恵まれた地となっています。生業の傍ら和歌や詩文に親しみ、茶や生花など風雅の道に目覚めた人々も多く、中でも俳諧は江戸時代を通し近江路全域で盛んでした。江戸時代中期、愛知川宿の裏手に西澤里秋という俳人がいましたが、今回はこの里秋をとりあげ、近江路、特に湖東と呼ばれる地域の俳諧愛好者たちの様子を紹介したいと思います。彼らは身分や職業を問わず、俳諧を通して広範囲に、また親密に、一つのネットワークを作って交際していたように見えます。芭蕉は俳諧のことを好んで「風雅」と呼んでいました。近世の安永から寛政期（一七七二〜一八〇〇）、愛知川の里秋を中心に近江の俳人たちによる「風雅のネットワーク」を概観してみたいと思います。

里秋の生没年は未詳ですが、壮年期を過ごしたと思われる

安永天明の頃は、芭蕉が亡くなってからおおよそ九十年が過ぎ、低迷していた俳文芸を芭蕉の到達した高みに戻そうとする「蕉風復興運動」と呼ばれる運動が湧き上がってきた時代です。俳人としては京の蕪村、几董、江戸の蓼太、白雄らが有名ですが、近江路の俳人たちに最も影響を与えたのは、芭蕉頭影に功績のあつた京都の蝶夢という僧で、里秋もその門人でした。

里秋と近江路の俳人のネットワークを知るには三人の鍵となる人物がいます。一人は愛知川で同じ西澤姓を名乗る芦水、一人は旧愛東町平尾の俳人で彦根藩の山廻りの役目についていた中西馬瓢、一人は森川許六のあとを継いで彦根藩門道統三世となつた森野治天です。

（一）愛知川宿の里秋と芦水

西澤里秋は『近江愛智郡志』巻三「人物志」に、芦水とともに次のように紹介されています。

西澤里秋は愛知川町の人、通称を庄左衛門といふ。性文雅を好み殊に俳諧に長ず。同町に西澤孝左衛門あり俳友にして芦水と号す。共に宿駅の事に多忙なる人なりしも、



の意を表して答えています。第三句里秋の転じと師由の四句目で、風雅な設けの席に慣れない袴姿でもじもじする男が現れます。5、月の座では蘭の薫り漂う庭に夜の月が上り、6、風にゆれる虫籠から松虫が今鳴き出さんばかり。愛知川の広野や蒲生野の情景を下敷きとして、風流に表六句が始まっています。それが7、初折裏に入ると里秋は「風呂すさまじき諏訪の宿」と中山道諏訪の湯の混雑ぶりを登場させ、八句めを去可は孝行な子を連れた湯治客が周囲に羨ましがられる人事句としています。里秋は仕事で中山道を往還することもあったかもしれません。歌仙は作法に従って三十六句続きますが、愁眉は初折裏中ほどの琵琶湖の鯉や里山に出る狼、癩病など当地の風物やスリリングな出来事を織り込んで展開するところでしょう。恋の句には『平家物語』の小督など古典からも題材を取り、俳諧らしい面白みと古雅な趣も取り込んでなやかに仕立てています。

客の去何は蝶夢の高弟で渡辺姓、浅井郡速水の人。里秋、芦水、仮興、師由は愛知川住です。十年後寛政十年の歌仙はやはり去何を正客として里秋が亭主、他芦水、師由、月川（大覚寺僧）、如毛（多賀神職後藤徳郎）、塘里（土田）温中（愛知川）の名があります。彼らは地縁もさることながら、京都蝶夢の門弟同士です。

さて蝶夢門人表には四人の西澤姓が並んでいます。

里秋 通称西澤庄左衛門、蒼空と号す。江州愛知川の人。

芦水 通称西澤孝左衛門、江州愛知川の人。

仮興 通称西澤甚五左衛門、江州愛知川宿本陣。

師由 通称西澤五郎助、江州愛知川の人。文化七年没。

（北村紫水『俳僧蝶夢』門人表）

愛知川宿の俳諧は本陣や問屋場など宿駅の業務を担っていた西澤家の人々が中心となつて、活発に近隣の俳人たちと交流し作品を残していたといつてよいと思います。また愛知川住であるかは確認できていませんが、里秋には俳諧をたしなむりう女という妹がいました。

### （二）馬瓢と蝶夢門人

平尾の馬瓢は通称を中西治左衛門、号酔茶亭。享保十七年（一七三二）生まれ、享和元年（一八〇一）七月十七日没、享年七十歳。農事その他彦根藩の山廻りの任にあり、湖東では著名な俳人でした。安永から寛政の頃の湖東の俳人たちについては、馬瓢が遺した多くの俳書や記録によつてよく伝えられています。『月のはなし』は馬瓢が安永八年（一七七九）更科の月を見るため善光寺参りにかけた時の紀行ですが、冒頭、出立に際して俳友達が見送りに来ており、その友人たちの居住地が記されています。

思ひ立ける日は安永八年亥の中の秋四日といふ也。

身を月にまかせて安き門出かな

我すめる里のあたり近き処に、大林といふ里に開発の奉

行休み給ふ亭ありこそ。遠近の友かき寄つとひて見送り  
俳諧を俱されけるに漸日も斜になれは其夜は同行が家に  
臥ぬ。

一里きて寝るも旅なり萩か本 馬瓢

(書入1) 枝村一笑・土田塘里・愛知川芦水・里秋・仮興・

上蚊野呉琴・多賀其由・白鹿背閑々坊・同庵洞夢

(書入2) 北坂本村吉園惣衛門・大清水村何かし口口

書入れ1に名のある友人たちはいずれも蝶夢の門人です。  
大上郡土田の塘里は曾我一郎次といい、湖東の俳諧を長く支  
え馬瓢の著作にもしばしば登場する人、呉琴は北蚊野村の造  
酒家北村氏と推定され、多賀其由は江戸の夏目成美とも親交  
があつた月川法師で、多賀社造管に尽力しています。閑々坊  
と洞夢は白鹿背山東光寺の僧、里秋、芦水の姿もあります。  
この俳人たちの住まいは彦根城下南から愛知川を越え、井伊  
直興菩提寺の永源寺付近までのほぼ彦根藩領南筋領域内にあ  
ります。東近江市愛東支所の東、大林という地にあるお休み  
所までは愛知川からおよそ十キロ、多賀土田からは十四キロ、  
馬瓢の一番の親友であつた呉琴のいた上蚊野からは五キロ、  
それらの距離を人々は歩き、大林で俳席を設けて餞別の俳諧  
を馬瓢に贈つたのでしよう。

風雅に遊ぶ彼らも現実には彦根藩内の領民であり、生産や  
流通に従事する上に宿役、村役、僧侶であり、彦根藩との繋  
がりも緊密でした。馬瓢の場合、藩林や村を訪れる彦根藩役

人との交渉も多く、その中で風交を結ぶ藩士もあり、請われ  
て俳諧の手ほどきをすることもありました。殊に知行二百石  
の後閑新兵衛とは親交篤く、梅風と俳号をつけたり高宮に出  
かけた折後閑家で遊ぶこともありました。また彦根俳壇の古  
老大久保氏都完の訪問を受けたりもしています。これらの  
人々との交流は文集『筆の塵』に数多くおさめられ、馬瓢が  
片田舎にあつても俳諧を介在として心豊かに過ごしていたこ  
とがわかります。『筆の塵』には、里秋が大宰府参りにキャン  
ピングカーならぬハウスを担いで行こうと企む愉快な記事や、  
また馬瓢が晩年観音巡礼の同行に里秋を誘う文があります。

○ 蝸牛庵のぬし里秋子、我隠れ家を訪ふていへるは、おの  
れ年来の願ひにより、此度筑紫の管廟へ詣んと思ふ。一  
中略―宿の愁ひのなきために家を荷ひ行かんと作りし  
は立五尺に足らず、横三尺に割竹をもて釜ぼこ形に粧へ、  
琉球箆をもて屋根に張り―中略―予、聞きて鳴神の恵み  
も厚からんと尊み奉りて餞別に

家をつれて大宰府参やかたつむり

○ 今年やや日数をもへぬる間に、更科の同行も吉野の先  
達も亡くならなければ、あすありの心にひかされての  
―中略―観世音の巡礼せんと思ひ立て、同行二人と笠  
の銘をしるさまほしと思ふに、ひたすら君をすすめま  
いらす。

はやくとも出よ涅槃に蝸牛

年長の馬瓢が愛知川の若者に目を細めている様子や、また風雅の友と頼みにしていた事が窺えます。

ここで、近江の俳人たちを結び付けていた蝶夢と蝶夢の主催した「時雨会」についてふれておきましょう。蝶夢は馬瓢と同年の享保十七年（一七三二）京都に生まれ、俳諧は十三歳で机墨庵宋屋に入門しました。蕉風俳諧に傾倒し三十六歳で寺の住職の座を捨て、仏に仕えるかたわら芭蕉を師とあおぎ、俳諧の研究と芭蕉の顕彰に生涯をおくりました。田中道雄氏によれば、蝶夢は芭蕉の俳諧を「道の俳諧」と理解し、芭蕉をその俳諧の開祖として崇敬したのです。蝶夢は蕪村と同時代の人ですが、都市型の蕪村とはまた違う啓蒙によって地方の人々の心を掴み、近江の俳人達の多くが蝶夢に師事しました。

蝶夢の活動は芭蕉の墓所である義仲寺の再興や追善行事を中心に進めるもので、荒れていた義仲寺を再興し、其角や蘭雪、許六など芭蕉直弟子の真蹟を集めて出版したり、はじめての芭蕉の伝記『芭蕉翁絵詞伝』を世に出すなどの功績がありました。蝶夢の行動を伴う俳諧の活動は常に門人たちを刺激し、それはまた門人相互の連携を促し、絆となつて湖東一帯に親密なネットワークが築かれていったのではないかと思えます。

当時蝶夢は毎年秋義仲寺で芭蕉忌「時雨会」を主催し、追

善俳諧興行の作品を『しぐれ会』という俳書にして刊行していました。『しぐれ会』は宝暦八年（一七五八）の蕉翁七十回忌『粟津吟』を嚆矢とし、評判を呼んで年々盛況となり、全国から句が寄せられるようになりました。天保五年まで七十四年に亘つて刊行されましたが、馬瓢が愛知川の里秋たちとともに始めて句をよせたのは明和九年（一七七二）のことです。その後湖東の俳人たちは継続的に『しぐれ会』に出句しています。

表Aは明和九年（一七七二）から文政元年（一八一八）まで、四十六年間『時雨会』に掲載された湖東の俳人たちの出句状況を一覽にしたものです。愛知川では芦水が最も息が長く文化六年まで出句を確認でき、頻度では里秋が続きます（●は最終出句）。寛政二年、三年に愛知川からは一人の出句もありませんが、町に何か重大事がおこったのでしょうか。

さて、愛知川の俳人たちの出句状況を見ていくと、人により違いはあるものの、途中でかなり長いブランクがあります。他の地域、平尾の馬瓢、土田塘里、速水の去何らはおそらく亡くなる直前まで継続して出句しています。しかし愛知川の温中などは安永七、八年に出句後は休み、十七年後の寛政十年から復活して文化元年まで続けています。里秋・芦水・師由も寛政五年の芭蕉百回忌を除けば四年以上休んでいます。いったいどういうことなのか一概にはいえませんが、愛知川の俳人の中には、商用などで長く遠方に赴くことがあり、そ

	東	平尾	白藤	白藤	多賀	牧野	豊知川	藤原	枝村	尾子	土田	土田	彦根	彦根	瀧水		
	雄琴	馬屋	雨々	羽夢	其由	具等	柳水	柳由	飯真	温中	有中	一美	兼光	瑞星	飛石	飛川	去何
明和9	○	○	○	○			○										
安永2	○	○	○	○			○										
安永4	○	○	○	○	○		○										
安永5	○	○	○	○	○		○										
安永6	○	○	○	○	○		○										
安永7	○	○	●	○	○		○										
安永8	○	○	○	○	○		○										
安永9	○	○	○	○	○		○										
天明元	○	○	○	○	○		○										
天明2	○	○	○	○	○		○										
天明3	○	○	○	○	○		○										
天明5	○	○	○	○	○		○										
天明6	○	○	○	○	○		○										
天明7	○	○	○	○	○		○										
天明8	○	○	○	○	○		○										
寛政元	○	○	○	○	○	●	○										
寛政2	○	○	○	○	○		○										
寛政3	○	○	○	○	○		○										
寛政4	○	○	○	○	○		○										
寛政5	○	○	○	○	○		○										
寛政6	○	○	○	○	○		○										
寛政7	●	○	○	○	○		○										
寛政8	○	○	○	○	○		○										
寛政9	○	○	○	○	○		○										
寛政10	○	○	○	○	○		○										
寛政11	○	○	○	○	○		○										
寛政12	○	○	○	○	○		○										
享和元	○	○	○	○	○		○										
享和2	○	○	○	○	○		○										
享和3	○	○	○	○	○		○										
文化元	○	○	○	○	○		○										
文化2	○	○	○	○	○		○										
文化3	○	○	○	○	○		○										
文化4	○	○	○	○	○		○										
文化5	○	○	○	○	○		○										
文化6	○	○	○	○	○		○										
文化7	○	○	○	○	○		○										
文化8	○	○	○	○	○		○										
文化9	○	○	○	○	○		○										
文化10	○	○	○	○	○		○										
文化11	○	○	○	○	○		○										
文化12	○	○	○	○	○		○										
文化13	○	○	○	○	○		○										
文化14	○	○	○	○	○		○										
文政元	○	○	○	○	○		○										

近江の俳人の「時雨会」出句状況

の間「時雨会」に出句できなかった事もあったのではないでしようか。近江商人であれば、壮年期に異国で過ごし晩年にいったいどういふことなのか一概にはいえませんが、愛知川の俳人の中には、商用などで長く遠方に赴くことがあり、その間「時雨会」に出句できなかった事もあったのではないでしようか。近江商人であれば、壮年期に異国で過ごし晩年に故郷に戻って、また俳諧を楽しむことがあったのかもしれない。寛政五年は記念すべき芭蕉百回忌であり、里秋・芦水・師由はたとえ遠方にあつても文通によつて参加したのではないでしようか。ちなみに森川許六の彦根俳壇を冷天から引き継いだ祇川は、日野の出身で長く仙台に居住したあと一度近江に戻り、延享三年（一七四六）彦根で冷天から伝書を受けています。その後また仙台岩沼、陸奥宮古へ赴いて彦根蕉門を広め安永三年（一七七四）頃帰国、晩年は石山の幻住庵に住んで「時雨会」に参加しています。当時は近江商人が関東東北に積極的に進出していたことから、祇川の前身は近江商人であつたのではないかと思われれます。

(三) 里秋と彦根蕉門

里秋について愛知川の地と蝶夢門の俳諧の交わりを中心に見てきましたが、里秋の俳諧には今一つ彦根蕉門という大きな背景があります。正徳五年（一七一五）、森川許六が亡くなったあと、芭蕉道統三世となつた雲茶店冷天は里秋の祖父



にあたります。治天は通称森野宗兵衛富秋、元禄四年（一六九  
 一）に生まれ延享四年（一七四七）没。五十七歳。彦根藩士、の  
 ち古医方名護屋玄医門医師。治天の娘から里秋と娘りうが生  
 まれています。西澤家が母の嫁ぎ先であったか、里秋が養子  
 にいったものはわかっていません。治天は藩主井伊直惟の  
 命により、享保十七年（一七三二）歌仙奉納の使者となって春  
 日大社に赴いています。

その治天が亡くなって安永九年に三十三年忌を迎え、里秋  
 は命日の十一月二十五日に蝸牛庵で追善の俳席をもうけ、追  
 善集『窓のあかり』を上梓しています。

祖父雲茶老人治天は蕉門の風雅を伝えて、許六菊阿  
 佛の道統たり。世を去て後、三十三年となりぬ。我  
 家のふるき障子に自筆の反古張たるうちに、

曇る日のあり所すかすや鳴く雲雀

おさまれる鉄砲の音やむめの花

若竹や巢たつ燕の羽つくろひ

（『窓のあかり』）

古い障子に貼られた治天の句には、彦根城下の情景が浮か  
 んできます。「鉄砲の・・・」の句は武者の高ぶりが独特の俳  
 風となった彦根の句にふさわしく、「若竹や・・・」は木導の  
 「春風や麦の中行く水の音」と同じく眼前の光景に景曲の心  
 があり、いずれも正徳・享保期の「彦根躰」をよくあらわし  
 ています。「窓のあかり」の名は里秋が「朝夕になかめて其世

の風流を思った障子の明かりにちなむものでしょう。治天の  
 句を巻頭に掲げたあと、蝸牛庵に招いた俳諧の友と巻いた追  
 善歌仙が続きます。

- |    |                |    |    |
|----|----------------|----|----|
| 1  | その跡のあかり慕ふて啼ちとり | 里秋 | 冬  |
| 2  | 三十年あまりの霜のふる塚   | 芦水 | 冬  |
| 3  | 松の葉をつたふ零のさまくに  | 馬瓢 | 雑  |
| 4  | 今御立やら式台の音      | 呉琴 | 雑  |
| 5  | 東雲にあつたら月の元かゝり  | 師由 | 秋  |
| 6  | われおくれしと山に入鹿    | 移鏡 | 秋  |
| 7  | 漸寒く衣の破をつくろひて   | 一笑 | 秋  |
| 8  | 筆もたせをく硯屏の上     | 徒遊 | 雑  |
| 9  | もの思ひ母の異見にまた乱れ  | 塘里 | 雑恋 |
| 10 | 水にうつらふ姿かなしき    | 引牛 | 雑恋 |

（『窓のあかり』）

初折の一順をあげましたが、移鏡以外はみな『しぐれ会』  
 に常連の人々です。発句、脇、第三は里秋、芦水、馬瓢によ  
 って冬季の追善にふさわしい句が詠まれています。しかし第  
 四句、呉琴のたくみな遣句で滑稽な師由の句を引き出し、当  
 世の里山に練り広げられる生活や恋へと展開していくさまは、  
 元禄時代に許六や木導らが巻いた彦根蕉門の歌仙に劣らぬ面  
 白さを持っていると思います。

彦根蕉門はその作品と許六の俳論によって高い評価を受  
 けていましたし、男らしく知的で時に繊細な武家の個性は、

多くの人を魅了していました。湖東の俳人たちが等しく彦根蕉門を敬慕し、その俳風を支持していたことは、当時の俳書から容易に知ることができます。

○文は作者のやさしき姿をあらはし、画は見る人の風情を起こさしむ。先師五老井は多能なる中に滑稽の道殊に弘く、風雅の真骨は孟遠治天に附属し、丹青の奇法は吾荻毛統にとまらる。(飛川序文『彦陽十境集』)

○湖東森川許六子の別墅五老井の井より出たる石をもて、予、硯となし弄ぶこと久し。しかるに月川法師の物語に東都に森川氏(千四)の自家あり。袁丁公といふ。此主俳諧を好みて許六の筆の物得たしなどのたまふと聞こえければ——後略——寛政二年戊春 (馬瓢『筆の塵』)

右の馬瓢の文章からは、許六の別墅五老井を訪ね、ゆかりの井戸の石で硯を作り彦根蕉門の頭領を偲んだ様子が窺えます。また『芭蕉門古人真蹟』によれば馬瓢は許六の山水画を、塘里は木導の短冊、葛籠町の引牛は許六・李由あての史邦書状を所持していました。

芭蕉道統三世の雲茶店治天の直系でありながら、里秋が俳諧を京都の蝶夢に師事していたのはなぜなのでしょう。それは当時の彦根俳壇の体制をみれば無理からぬものがあります。元禄六年、許六は芭蕉の親炙を受けて帰国した後、盟友

平田明照寺の李由とともに、蕉風の一派湖東の彦根蕉門を立ちあげました。当初の彦根蕉門は彦根藩士と僧侶、医師などを主要なメンバーとしており、個性的で魅力的な俳諧作品が作られました。高い知性と武ばった気風の特異な俳壇であつて、庶民レベルに浸透していくことは難しいものがあつたようです。彦根蕉門の最大の問題点は主流構成員が官袴に繋がれた藩士で、俳壇の経営に全力を尽くせないことでした。許六の場合は李由、汶村、木導など新進のメンバーが揃つていたこと、第二世代の孟遠・治天の場合は、孟遠が致仕剃髪して行脚に赴き、治天を彦根に配する、という体制で俳壇を成り立たせていたといえます。

正徳五年(一七一五)許六が亡くなつたあと、弟子孟遠は京都を基点に中国地方や九州に行脚して彦根蕉門を広め、治天は彦根にあつて本拠地を束ねる体制を築き、西国と京都・彦根で活発な俳諧活動が行われました。これは彦根蕉門を天下に喧伝するといふ許六の願いをよく果たしたものと云えます。しかしこの俳壇構想は享保十四年(一七二九)に孟遠が備前岡山で客死、治天が延享四年(一七四七)に亡くなって消滅していきます。治天が生前後継者に指名したのは先に述べた祇川でした。ただ祇川の役割は、孟遠のように地方に彦根蕉門を広めることであつたと推測され、彦根に帰ってくるものがあつたにしても主な活動の場は陸奥・奥羽にありました。そして「風雅の根城」(千五)、本拠地の彦根には治天のような指導者を据えることができなかつたと推測されます。

彦根俳壇に当面の指導者を見出しえない、という事情もあって、冷天没後の宝曆から明和の湖東の俳人たちは個人的な結びつきの中で俳諧活動をしていたと思われまます。

そのような時、大津義仲寺から蝶夢が発信した蕉風俳諧への復興運動は、確たる指導者を持ってないでいた湖東の俳人達の心を掴むものでした。彼らは毎年蝶夢主催の芭蕉忌に参加し作品を発表しています。これをきっかけに湖東の俳人たちは、すでに築いていた地縁的なネットワークを、近江路の「風雅のネットワーク」へと大きく機能させ、蕉風復興運動に寄与したと思います。そして愛知川の里秋たちは江戸時代中期の中山道で、風雅俳諧を通じて、人々の交流の場を築いていたといえるでしょう。

彦根蕉門も陸奥から帰郷した道統四世祇川が運動の一端に参画しています。しかし、その祇川が世を去るまでの三年間、支援と支持を続けたのは城下の藩士たちではなく、蝶夢と里秋ら彦根周辺の俳人たちでした。彦根蕉門の混迷・衰退期を支えていたのが近江路の俳人であったことも忘れてはならないことでしょう。<sup>(十六)</sup>

#### あとがき

豊満神社の拝殿には天保から昭和初期にかけて十数個の奉納俳諧額が掛けられています。中で最も古いものは天保七年（一八三八）、宗匠芭蕉庵蒼虬が撰をした発句合せです。川瀬、吉田、木流、三津屋など近隣の人々による百五十句を掲げた

長大な奉納額で、俳諧の裾野の広がりを感じさせます。しかし裾野が広がった分、近世後期から近代の大衆的な俗に陥り易い俳諧であることはいたしかたないでしょう。一方天保から五十年遡る里秋たちが蝸牛庵で巻いた歌仙は、彦根蕉門の流れを汲む、式目を守りながら滑稽味もあるすぐれて文学的な作品です。愛知川の俳人たちが文学史上重要な「芭蕉に帰れ」という蕉風俳諧復興運動に係わった人たちであること、湖東全域に人的、文化的なネットワークを持ち、すぐれた作品を残していることはもつと評価されてよいことと思います。現在『愛知川町史近世編』の調査が着々と進められている過程で、彼らの奉納額や、『愛智郡誌』に紹介された原資料の歌仙が発見されることを願ってやみません。

#### (注)

一 「その器、画を好む。風雅を愛す。」（芭蕉「許六離別詞」）。「我家の風雅」（『芭蕉遺語』）。「詩歌。連／俳は共に風雅也」（『三冊子』）。

二 その後蝸牛庵は引越しをしている。「さるをその地にさはる事の出来れば―中略―庵を今の地にとみにひきずり来りける」

（『蝸牛庵記』『蝶夢和尚文集』）

三 森川許六の別墅。彦根原村。

四 森川許六の盟友であった僧李由の庵。平田明照寺。

五 『俳家奇人談』を著した竹内玄々（文化元年没）か。号竹窓。

六 『近江愛知郡志・文筆志』掲載の蝶夢「蝸牛庵記」には「たゞ

農事をわすれて長居せは」とある。

七 『俳僧蝶夢』付録。北田紫水 昭和二十三年 大蔵出版

八 冷天追善集『窓のあかり』にりう女の記事あり。

九 東近江市『平尾区有文書調査報告書』目録122の庄屋次左衛門は中西馬瓢、1225桃之尾山廻り中西次右衛門は馬瓢の子息と思われる。

十 『近江愛知郡志』人物志「呉琴」による

十一 祇川が編集した許六五十回忌追善集『影法師』跋文

然るに余あはうミなる朝日野に生れ、雲茶店の門に入てもはら此道をしたふことははたとせあまりならん。みちのおくに足を止むといへと猶くさくゆのゆかしきもしけ、れは一とせ彦城にのほり松琴庵に日をかさね彼しらすなをも伝りぬる。

(『影法師』祇川跋・明和元年)

十二 千手寺『温故知新』また寛文ころ愛知川村庄屋役で医師、

彦根藩御用人もつとめた森野弥右衛門との所縁が考えられるが、確証はない。(近江愛智郡志・人物志)

十三 通称野村九郎兵衛。犬上郡葛籠町の人。『蕉門古人真蹟』に

許六・李由宛の史邦書状を寄付している。

十四 旗本森川金右衛門家

十五 孟遠が本拠地彦根を呼んだ言葉。

変を聞くより鴈羽の袖を翻し、風に乗りて錫杖を横たえ万里の波濤を凌ぎてつつがなく風雅の根城に帰り付きけり

(七七忌追善『两部餅祭』)

十六 祇川が彦根俳壇と不通になった時、幻住庵に居住をすすめた

のは蝶夢であり(「安永七年白輅あて蝶夢書簡」)、その後薩摩に遊行して病を得たとき最後まで看取ったのは里秋らと交際していた有中である(祇川追悼集『風の蟬』祇川と彦根俳壇との関係については「彦根俳壇の継承者」(『成蹊国文』二〇〇七年三月)を参照されたい。

\* 蝸牛庵の二歌仙には適宜読み仮名、ルビを振った。

\* 表Aの作成は義仲寺刊行芭蕉忌追悼俳書によった。

(参考図書)

『俳諧大辞典』明治書院

『時雨会集成』平成五年十一月 義仲寺・落柿舎

『近江の連歌俳諧』木村善光・サンライズ印刷出版

『新日本古典文学大系73』「遠江の紀」解説田中道雄

(成蹊大学大学院博士後期課程在学)